

総務産業常任委員会会議録

- 1 日 時 令和6年9月9日（月）
14時50分開会 15時47分閉会
- 2 会議場所 役場3階 第1委員会室
- 3 出席議員 委員長：中河つる子 副委員長：田村幸紀
委 員：只野敏彦、鈴木孝寿、中島里司、深沼達生
議 長：山下清美
- 4 事務局 事務局長：大尾 智
- 5 議 件
(1) 道外研修（厚生文教と合同）に係る協議
(2) その他
- 6 会議録 別紙のとおり

【開会 14 : 50】

(1) 道外研修（厚生文教と合同）に係る協議

委員長（中河つる子）：只今より総務産業常任委員会を開催する。今日は、道外研修に係る協議ということで、前回鈴木議員のレクチャーをしてもらうということになっていたものでそれでよろしいか。それでは鈴木議員お願いします。

鈴木委員：それでは私がまとめたというか、まとめてないのだが資料として、神山市についてまず最初にお話すると、ものすごい人気ある町、視察に。多分、日本一とは言わないけど四国ではナンバーワンだと思うし、もう数知れないぐらい来ていると思う。一番何が見てわかりやすいかと言ったら、ネットで見たらまず各行政、議会の報告書というのが山のように出てくる。その中で代表的なものを入れさせていただいた。それを何件か見てくと、まず説明する内容というのはもう型にはまって決まっている。我々が聞きたいところというのはその流れを聞いたとしても、そのあとの再質問、いわゆる今日の一般質問ではないけれど再質問することによってうちの町にとって何がいいかというのは多分やっていかなくてもならないと思う。大体同じようなこと書いてあるのだけれど、それにしても、説明を受けて質疑しているのだろうけれども、多分そういう準備をしているところは意外とないので、うちはこういう勉強の機会が今回あるので私を今回中心にさせていただきますけど、大体こういうときは必ず委員会報告書とかを調べたりする、道内はそんなに何か所も見ることがなかったからあまり見ていないけれども、そこから説明されることというのも、定型文みたいな感じであるから、それに対してどう質問していくか、町に対してどういいのかというのは本当そこばかりいつも見るようにしている。今回いく神山市、まず1ページ目からいくが、まず特筆すべき点というのが、開いてもらって5枚目に委員会行政視察実施報告書とあると思う。大体このこういう説明されると思う。この町のすごいところというのは、本当に頭のいい人がやっているなというのがわかるのだけれども、なぜかという、まず1991年の3月にアリス里帰り推進委員会、ペンシルベニア州のウィルキンズバーグから友好親善のために送られていた64年ぶりにもらったものを65年ぶりに返したという、運動というか、委員会を作ってやった。それが要は、そういうまちづくりに関係ないような住民を集めて、委員会作って海外とのやりとりをする。これの何が良かったかと言ったら、結局は成功体験を、若い人たちも含めてそういうまちづくりをしたことがないし、成功体験を体験させるという、うちの町では絶対ないのではないかと、過去にも。それで、その成功体験というのは、企業とかも、まずは最初にやらせて上手に企画させて、うまく乗せてやるというのがよくあるパターンで。これは、成功体験を糧に次へ次へと展開していく。それをうまくやっている町である。そのあとの話をするけれども、この成功体験を経て、次に、例えば神山市国際交流協会というのは、ALTの受け入れプログラムをこの団体の人たちと一緒にやってみると委員会報告書に書いてあるけれども、そのあと国際文化村委員会という県単位でやっている部分をこの団体で受けたわけである。これが、後々2004年にNPO法人グ

リーンバレーがあるのだけれど、このグリーンバレーというのも面白いというか、活動が面白い。少し飛んでしまったけれども、表紙に戻って神山プロジェクト、そのあと説明がいろいろ出てくるのだけれど、何年か前のうちの議会、サテライトオフィス清水町に誘致してと商工会とかもいっていた。そのためにインフラ整備してくれと、人と繋がり始めるとまさにいいところ取りをするのだけれど、もちろんそのあと色々な事業をやるのだけれど、何が違うかと言ったら、神山塾とか色々それは多分この前の資料に書いてあったけれども、色々な取り組みをするのだけれど、まずそれは住民が自ら行うというやり方をして、体系的にではなくて、結果的に体系的になるわけで、最終的には何の目的と言ったらNPOを中心とし、色々な事業を発生させていくのだけれど、多分大分失敗もしているのだとは思いますがもうまくいっている。それが世間的に評価を受けているところのサテライトオフィス案という考え方は、多分田舎でやったのは初めてだと思うので。二番煎じ、三番煎じ、やろうとするのだけれど、こんなもの今からやっただけでうまくいくわけがないが、うちの町としては、ただ、参考にはなると。今回参考になるのは、全体を通じて考えていくなれば、この赤い文字で2つ後ろに書いてあるけれども、うちの町はそうではないというのだったらそれで結構だけれど、どれやっても、必ず横に繋がっていかない。でも、ここは全部繋がって体系的に考えてやっている。ここに出てくるのが最後の方のページに出てくる、この大南さんなんかよくわからないけれど、この方がやはりキーマンとしてスタートから始まっているのである。この方は調べてみたら、随分若いうちから、アメリカのスタンフォード大学の大学院修了して、自分の生まれた神山町に帰ってきて仕事しているのだけれど、帰ってきている歳が大体考えたら40代ぐらいで帰ってきていて。何の仕事しているのかとかはよくわからないけれど、これはまず聞きたいというところで、この人がすべてプログラム組んでいたりしているので、役場職員でいいのだけれど、とは言いながらまちづくりというのは役場と一緒に手伝うのはいいのだけれど、考え方はやはり町民を育てていかなければならない。こういう町民、こういう突出した人がいたらそれについてくる人って結構出てくるので、そういうのは本当に必要。だからここは成功していると思う。体系的にいろいろなことをやっているけれど、最終的に今ここでやるのが、やはり人材の大切さというのを改めて感じた上で、今、高専を作ろうとして、この辺で言うと釧路高専とか旭川高専みたいな、丸ごと高専だったかな、なんかそういう高専を今作ろうとして、それも、この20年間日本全国でできてなかった高専を今作って今人員募集していると、もうそこまできているという面白いやり方をしている、神山町に高校もあるし、高校が多分100人もいないはず。20何人とか、1学年20人とか40人ぐらいだったら100人いるかいらないかぐらいの学校で、後々の清水町と似ていると思いつつ、それはどうするかは別として、まずは本当に高専の人を呼ぶということは、すごい物の本とか、色々この前委員会でもらった本読んでいくと、人づくりにやはりものすごい力を入れているということがわかる。最終的に高専まで行ったのだけれど、高専は結局、人材を集めるのには、やはり学校というのが1つのキーになって、大学とかでは駄目なのだよと、高等専門学校、高専、要は中学校卒業してから来るという高専を、今やるというのは面白い発想だなと。なかなかこれ清水では難しいかもしれないけれど、でも清水でもやれないことはないのだけれどそれまでのプロセスをどうしたらいいかということがすごくあると思う。また最初に戻るが最初のページの一番下で、今回我々が行くのは定住移住と言っている。それで、僕らが質問しなくてはならないのは、こういうのにも大体出ている一番新しいので、表紙の次のページからというのが、大体似たようなものだと思うのだけれど、今年の3月6日に報告しているという神山町のレポートで、大体僕はこれと一緒にだと思って、ふる

さと納税云々書いてあるので、ここをちゃんと読んだ上で同じ質問してもしょうがないので。一番大事なのは、我々議会としては、役所と地域住民との関わりというのがまず1点目、これは絶対質問しなくてはならないと思っている。あとこれをやり出してから役場内の温度差とか。あとは住民の温度差というのはうちの町と比べたときに絶対ここは出てくると思う。それで、僕は質問したいという、ぜひ質問して欲しい、ただ、色々な書籍も読んだりホームページ見たりとかしたって見えてこないのが、実はこの隠れた問題点って何だったのかというのが実は全然出てこない。絶対ある、何につまづいたかとか。ただやはり全体からすると、うちの町と何が違うのだろうというところを皆と共に説明で受けた上で、質疑していかなくてはならないと思っていた。まちづくりの基本は、僕の経験則ではないけれど、僕もまちづくり団体に入っていたからあれでしか、行政主体とかでやるとうまくいかないよ。今までの続きの中で行政主体で発案してやっとうまくいっている事業って他にあるかといったら清水ではないと思う。他の調査でも難しいのだけれど、逆に今日田村委員が言っていたアイスホッケーなんていうのは、行政主体ではなく、そこはもう今でも繋がっているというのは、うちの町の成功例の1つ。ただ、課題でもあるし。この町は本当に体系的にいろいろなサテライトオフィスとかいって人の繋がりで全部呼んでくるわけだ。行政の繋がりとかなかなか、成功体験の上での人づくり、そして発生していく仲間づくり、それをみんなで共通点としてここよくやっているのが、創造的過疎という言葉で2007年から使い出して、これはこの理事、今理事長代わってこのグリーンバレーの理事長、大南さんではないけれど当時の理事長として大南さんが、すごく面白いというのは人口回復のねらい、狙うのではなくて、過疎の状況を受け入れて、数ではなく中身を改善していく、農林業のみに頼らない、均衡のとれたバランスのとれた持続可能な地域を目指すというのがこのNPOグリーンバレーのモットーというか、最初の考え方みたいなので、これがやはり1つに偏らない。それと、地域のためにやるのだから、極論言うと、利権とか金儲けのためにやるとか、やらないといけなくて本当に素直にまちづくりをしていった方が絶対的に人は集まるといような考え方なので。それでうまくいっているのかと。でも本当にそうなのかどうかというのを我々が聞いて、この町の、なぜ成功したのかと言ったら、でも単純なのである。人づくり、絶対に人づくりで、そこをどうやったらうちの町で持ってこられるのかということを聞かなくてはならない。そこ難しいのだけれど、でもこれだけ報告書があって、ずっと読んでいたら結局何って言ったらここは人づくりすごいということしかないのである。かといって、今はもう僕は議員になった当初7,800とか8,000人近くいたのだけれど今もう5,000人ぐらいになってしまっているので、やはり1,000人ってあつという間に10何年で減っているから、それがどうなのかと言ったらあれだけれど、でもそれでも人づくりをやりながら、地域の活力をできるだけそがないような形をとれているのではないかと、色々な店がオープンしている、チャレンジショップではないけれど、さっきの光市議会のやつ。開いた2ページの目に、地域課題に対する取り組みと成長成果神山プロジェクトとあるけれども、その後、サテライトオフィスはさっき言ったような、これやったよと、次にワークインレジデンスという、ストローカフェ、パン屋、ピザ屋、靴屋、惣菜屋とか何とかあった。こういうのが誕生する。でもこれも今どうなっているかわからない。今もやっているとはいいながらも、神山塾というのをやりながら、クリエイターを中心に呼んだり見たりとか、もうここに書いたのは6期77名終了して、定住を50%、サテライトオフィスの就職10名、婚活も10組いるとかいうのが、これが平成29年の話なので大分前であるが、今これがどうなっているか。例えば今商工会でやっている、この前の広報でもアンケート来たと思うのだけれども、うちの町にどんな商店

が必要かみたいなことが書いてあったけれども、多分その答えがここに書いてあると思う。もう大分前にやっているところが、今人口減って何やっているのか、これがまだ続いているのか続いていないのかどうなのか、そしてそのあとどういう方向性で今向かっているのかというのをもし見られた時に質問したいというのはある。今商工会でやっているチャレンジショップの成果というのは多分これになってくるのだったら、成果とその後はどうなのかということも調べるならこういうところで調べる。これ、時系列は何年ごとという報告は書いてないけれど、読んでいくと、先程局長も言った質問の中のやつで、2ページ3ページ、4ページ5ページの内容を全部、それぞれ向こうの神山町で報告してくれるので、この中からうちに合わせたような質疑をしていかななくてはならないと思っている。例えば、考え方を1つ変えると、今日ふと思ったのがある。委員長の質問で申し訳なかったけれど、委員長の空き店舗、こうやって開いてくれたらいいなという質疑を見ながらこれをずっと考えていたのです。そのとき思ったのは、結局行政で頼んで開けてもらうではなくて、やはり周りを活性化させてぜひ貸してくださいというような、地域づくりをしなくてはならないというのは、多分最近こればかり読んでいるからそう思う、空き店舗空き住宅とかいっぱいあるけれど、今、そんなに活用する人がいないから空かないだけの話であって、どこかに色々なものを火をつけてくと、意外と解決は早いのかと思ったりもするのだけれども、所詮それは絵空事だけど、ただやはりキーになるのは人づくり、やはりどこでもうまくいっているのは人づくりが上手にやっているの、この上手なやり方を質疑していきたいと思うのでぜひ皆さんにも質疑して欲しい。これだけ成功体験もあるので、余りにも多すぎてどこを説明していいかわからないのだけれど、多分田村副委員長あたりは、わかったっていっぱい質問してくれると思うけれど、目的に向かってやるにはやはり遠回りしなくてはならないのだけれど、一番大事な人づくりやったら、自然発生的になっていくというのを僕はどうしてもみたい。そうではないのだったらそれはそれで面白い。そうじゃなかったら行政がやはり指導してやっていると思うし。でも、絶対行政主導じゃない。でも行政の協力の仕方というのも皆で質問して欲しいと思う。非常にぎくばらん言い方になったのだけれど、この前いただいた資料全部見たってわからないと思う。僕もわからない。でもこれで行く前に本当に、神山町行政報告もしくは委員会報告と検索してみると、100以上出ているから、古い時系列ではないけれども、みんな同じようなことが書いてある。同じことを聞いても同じ質問してもしょうがないので、これを読んでしまえばいいだけだから。でも、実際今まで行くということはその町村その町の担当者をどう考えたのか、どういう失敗があったのかというのは聞くべき、聞かないと無理、いく理由がなくなると、繰り返しになるけれど、ここに書いてあるような報告書の質問ではなくて、ここにうちの町だったらどうなのだろうという質問を是非した方がいいと思う。それは答えは返ってこないけれど、うちの流れの中で、僕は阿部町長が悪いとか云々でなくて、うちの清水の文化はそういう文化だから、なかなか大昔から、建設業が強かったり商工会が強かったり、農業が強かったりしても、1つになることもなかったの、こういう疲弊したときだからこそ何とかしなくてはならないと今言っているけれど、今まで何かあるたびに、それぞれ足引っ張っているようなものだから、うまくいくためにはどうしたらいいかと言ったら、それぞれで共通して人づくりをしていくしかないというような僕の結論である今回の。ずっとそう思っているのだけれど、そこだということである。以上、鈴木レポートである。簡単な質疑なら答える。

委員長：はい、ありがとう。今これをもう少し読んでみたいと思うけれども、それぞれが同じ質

間では駄目だということ。やはりみんなそれぞれではないと。

鈴木委員：一緒になってもいいけれど、重点的に聞きたいところである。重点的に聞きたいところは、例えば定住移住と言っているのだけれど、定住移住ものすごく進んでいるのだけれど、結果として進んだというだけであって、それを今うちのやっている方がいいわけではなくて、うちは定住を先にしている、住宅を先に整備して、その考え方はないとは言わないけれどここは違うわけである。なぜそうするかと言ったら黙っていても人が来る仕組みもしてしまっているから、そういう住宅を整備しなくてはならないとなるのである。だからそこが違う。まず着眼点が違うというか、今からでもうちの町は遅くないのだけれど、定住移住進める前に、進めてもいいのだけれど、その前に核となる人づくり、まちづくりの動きを作らないと、僕はないと思っているから、また、アイスホッケーだけではなかなか固まらないというか、進まないと思っているけれど、もう1つ2つぐらいないと。それが何なのかということなのだけれども、そこはやはり真剣にここ数年で考えて行動に移さないと、取り返しはもうすでにつかない状態ぐらいまで来ているけれど、まだまだ捨てたものではない。

深沼委員：結局さっきから人の繋がりと言っている部分の中で、清水の定住移住のやり方のまるっきり逆パターンというか、結局は、神山町自体の魅力というものがあるから寄ってくるということでもいいか。

鈴木委員：この資料でいくと、1991年ぐらいからスタートである。成功体験をさせてからぐるぐる回すわけである。サテライトオフィスしつつ、この町って本当に何も無い、黙っていたら限界集落、それは受け入れるくらいの気持ちで、だからみんなで何とかしようと切実に変わっていくところでもあり注目されている。すごい優秀な人がいるのである。その人がどんどん仲間増やしていて、それが出来るだろうと思う。

只野委員：鈴木議員の熱い気持ちはわかる。だから、私は鈴木委員が先に質問していただいて、その質問の後に我々が質問するという形がいいのではないかとと思っているのだけれども、それは時間的にも非常にないという中で、鈴木委員が言った後、私わかんないのは向こうの委員会が一緒になってやる。今回、別々でないから、その辺の兼ね合いもこれはどうなのか。

事務局長(大尾 智)：前回うちから出した依頼文書に書いてあるのだけれど、鈴木委員が集めてくれているもの、神山プロジェクト、正式名称はまちを将来へつなぐプロジェクトというのが基本的な説明項目らしい。町の基本情報を最初にやっていただいて、そのあと鈴木委員も言ったように、説明項目が定型化している。多くの視察に対応するために。その中の1つが丸ごと高専とふるさと納税、それから、デジタル田園都市アプリ、さあくるの展開、それからもう1つが、移住交流事業とサテライトオフィスの取り組みということで、向こうの説明項目がうちの委員会と混ざっている。それで向こうの担当者も、分けて説明は難しいという事だったので、一応、神山町については、全体で同じ話を聞くということになっているので、今の話を厚生文教の方も含めてやっていただいて。最初に言った将来へつなぐ神山プロジェクトについては、基本的な話なので、そこでお聞きして、後は鈴木委員言われていたけれども、所管としては教育関係なので厚生文教という気もするけれど、もちろんこちらでお聞きしても参考になる

話なので、今言った部分を共通でお聞きするという形になる。

只野委員：それならなおさらのこと一番良く知っている鈴木委員に最初質問していただいて、そのあとに我々がそれ以外の聞くことがあったら聞くと、ただ本当に時間がなくてもいいないので、よく勉強されている鈴木委員が、いつもの定型の質問だったら、またこんなことかということになるので、そうでない質問を先にやってもらって、本当はこう聞きたいのだというのを聞くという形の方が、有意義にはなるのではないかと思います。

委員長：そういう格好でいいか。

鈴木委員：全然それは構わないし、でも調子に乗りすぎると僕30分ぐらい質問しているので、皆質問できなくなってしまうからあれだけれど。

事務局長：一応、時間としては4つと言ったけれど、最初のは基本事項で質疑応答を含めて1時間。残り3つが30分ずつの説明とされているので、この辺どうなるかわからないけれども、それなりに説明を継続していただいて質疑応答30分ぐらいかけていただくか、その辺は臨機応変にできると思う。

委員長：基本のところでは1時間あるとなれば、鈴木委員の30分あたりしなくても、みんながそれぞれ思っていることが言える。

事務局長：基本でまず、うちの町こんな町です紹介が15分。それプラス質疑応答15分の30分がまずはセットになっていて、あとは、それぞれテーマごとの説明が30分なので、最小限1時間の説明である。1時間ということにはならないし、他のことも聞きたいので、残りのテーマ聞くのであれば30分ずつ1,000円ずつ払ってくださいというのがコースになっているので、それで全部で休憩なしだと2時間半ぐらいになる。3時間超えると長すぎると思うので、ふるさと納税、高専、それから田園都市地域アプリとあと移住定住サテライトオフィスという4つの項目をお願いするということにしたところである。

委員長：イメージが湧いているか。

事務局長：鈴木委員も説明していたけれども、最初の社団法人の地域活性化センターで言った報告がそれこそ近いのではないかと。①と②がそのまま。フィールドワークの②で、地域アプリもあるし、あと納税と学校支援というところもあるので、この辺の感じの説明を向こうはしていただけたらと思う。あとプラス移住定住の部分をお聞きするので。

鈴木委員：こういう取り組みがあるのだという事、我々議員自体こういうのを理解した上で絶対マイナスにはならないので。

委員長：先程話のあった清水の例と合わせて、アイスホッケー協会が1つあると言った。御影地域に住んでいると、例えば上羽帯地域の農家が新しく入った人とか、前は井沢さんという人がいたけれど、新しい人が入っていて、それから千年の森があったり、それか

らレストランがあつたりとか、色々な人が入っている。あそこを農家の人も新しい子供さんを介したりしてまとまっていて、例えば御影地域のソフトボール大会なんかもそこでまとまって出てくる。そういうのが御影ではいくらかあつて、旭山はそういうことで出てくるのだけれど、その1つの団体があると、それが1つだし、またそういうところがあるし、その地域によって色々そういうものがあつて、それがまとまってソフトボール大会をやつたりとかなるのだけれども、そういうのが清水全体で考えてそうならば、色々なまちづくりとか、大きくというか1人2人じゃなくて、色々な団体が入って大きくなっていくような、私はイメージとしてそういうものが浮かんだのだけれどどうか。

鈴木委員：今日、運動会の話をしたが、あれもすごく本当になくなったことによって地域崩壊したのだから。ただ、それもわかっていて、だから僕はよくうるさく、修学旅行で清水と御影で別々のところ行ったら本当は共通の言語がなくなってしまうという話で、また親子世代でも上下の世代でも、一方は東京行つた、一方は昔から函館青森である。東京行つてもどっちでもいいのだけれど、ただやはり共通してしゃべれる文化がなくなるというのは一番怖いことであつて、だから僕うるさく言う、実は適当に言っているのではないというか、考えて言っている、怪しいと思っているかもしれないけれど、そういうのって大切だから。さっき委員長言われたようにソフトボールにしても実はそれでもいいのである、そこで仲間づくりと人づくりをみんなでもらうというのが、今うちの町にこの10年20年ないところ。全くない。運動会もなくなつてしまつて、運動会もどうかと思うけれど。昔はそれでもよかった。それでよかったのだけれど、今こうなってくるけど、もう隣近所で誰が住んでいるかわからないという都会みたいな世界になってきているから、そこはやはり、そうではない、うちの町はもっと小さいと、もともとというぐらいのイメージでやっていかないとならないというのを、自分がここで証明したいと。僕の考えがあつているのかというのを、ずっとやってきたのはそういう点でやってきているからというところなのである。だんだん面白くなつてきたでしょ、あと、フェイスブックとかツイッター、Xやっている人もぜひ神山村登録してください、面白いですから。動画から何からみんな流れてきて、どこの地域と変わらない、うちの町でも変わらない、夏の風景とか。でも、そこに一生懸命やっている人たちがいると思ったら、何かこう見ていても面白い。そういうの、せっかくだから、その町をまず知るというのは、事前に知っておくというのが一番大事だと思う。

只野委員：今回は、前に浦河と栗山行つて、その前新得と鹿追行つたときに、役場職員が付いてきた方がいいと言つて、付いてきてくれたのだけれども、今回担当課は付いてこないのか。我々もネットやなんかでこういうのを見ると書いてあるけれども、やはり実際に行つて、その話を聞くことによってもっと深めるとか、行つた話では違ふ話も出ていたりとか、いろいろ新たな発見もあるということで、やはり行かないとわからないというところがあつて、職員が来るというのは、今日の一般質問でもそうだけれど、できないとか、考えておりませんと言われてしまうと、もう次喋れないし、質問してもなかなかということになるから、相互理解のためにやはりいい町を一緒になつて作っていくのだというのであれば、役場職員も一緒に行つた方が、しかも担当課が行つた方が、この話は深まって有意義になると思うのだけれど、てっきり行くかと思つていたのだけが違ふ。中島委員も昔はやってたということは、去年の段階で言っ

てくれたので、近隣も行ったし浦河も、栗山も言ったから、今度も行くものだと思うた。そこは駄目だったのか、もう今さら遅いけれども。

事務局長：道内はそれほど旅費もバスで移動すればかからない。道外研修になると我々の旅費がかかる10数万。今はそういう予算化はされていない。言わなかったと言われればそうだけれども今回は最初から想定してない。

只野委員：次回からというか、その要望をしておかないと、一般質問でこういうところに行って、こういういいところがあったと言っても知らないで終わってしまう。

事務局長：今からは厳しい。

中島委員：今から厳しいのも事実だけれど、今議論しているのはそんなことではなくて、私たち委員がどういう知識向上していくかということが先であって、職員と共になんていうとかっこいいけれどそういうことにはならないと私は思っていて、まず一回行って聞いてきて、どの程度自分のものにしてこられるか、私はこれ見て自信ないけれど、結局そういう自分たち議会がどう評価と言っている。職員はそこまでいって、当初から必要である必要がないと話しているのだろうけれど、この場でそれを議論する必要はないと、現状でいかなければ駄目だろうというのは、先程鈴木委員が人づくりと言ったら、ここは人づくりしていない。スタート時点は、この大南慎也さんという方が故郷へ帰ってきてくれて、その輪を広げて、それで同調者がどんどん増えてきて人ができ上がってきたと。私も聞いていて羨ましいと思っているけれども、色々人づくりが大事だというのはその通りだと思う。それから考えていくと、質疑の中がこれだけ色々なことに広がっている中で、全員が何かしようという問題ではないような気がする。只野委員が言ったように、1人か2人に言うことはまとめて、向こうの委員会もそうしなかったら、時間多分足りないと思うので、その辺をうまく調整しながら、みんなで一つ一つ質問するのではなくて、本当に申し訳ないけどそれぞれ委員会から1人か2人。そういう形にしてもらった方がいいのではないかな。私は否定する気はないけれど、同行職員については、今議論する場ではないということで、次回そういう機会があったら考えてもらうということで、先進めてもらえればと思う。

委員長：そうすると、両方の委員会から質問ということで、全員が質問するには時間が足りないということで、今中島委員言ったような1人か2人が質問するということで。

鈴木委員：中島委員が言ってくれたのはありがたい話だけれど、でも、僕もそこまで責任取れないので、ある程度最初のうちはもう少し、先程只野委員も言われたように質問していくけれど、それ以外は、例えばよく質問される田村委員とか、只野委員とかも質問しっかり作っていただいて、最後は締めめの質問を委員長にお願いするというぐらい。本当かどうかかわからないけれど。でも時間もあるので、質疑やっているうちにこれはどうなのだろうと、例えば僕とか只野さんとか、質問しそこなうことがあるのではないかな。それをうまく皆で拾っていただいてやるのがいいと思う。

委員長：ということは、やはり皆それぞれ自分の質問も考えてくるし、そのところで出てきた中での質問というのものもあるかもしれない。

中島委員：時間の関係で、許されるなら代表がしっかりとした質問をしてもらって、時間があれば、逆に言うと時間が余って空白にするのももったいないから、質問があったらその時に質問してもらって、いただいた時間を余さないようにするのがいいと、臨機応変にやっていただきたいと思う。

委員長：只今中島委員が言われたような、時間の関係で2人なら2人質問するけれども、各自の質問を考えて、その中で質問ができるように考えていくということなる。

只野委員：鈴木委員はこのぐらいなら30年かけてやれると先ほど言っていたけれど、私は本当に非常に難しいと思う。難しくて、神山町のこれを読んだときにこれは大変なことだなと思う、本当にやるのが。こういう発想も大変大事なんだけど、やることもすごい大変なことだったと思うぐらいなことなので、なかなか私みたいのが質問するよりも、鈴木委員みたいに昔からそう思うと言うという方が、定型文ではないようなところもあって、質問できる人がやった方が効率的にある。だけど、さっき言ったようにそこで余ったら他の人が質問できるようなことがあったら質問しよう。ただ、合同だから、向こうの方とも変なようになって困るし、こちらは有意義な形でやっていったほうがいいと思う。

事務局長：明日、全員協議会があるので、そのあと、それぞれ今日の委員会の話をしてもらって、まとめのようなことが、明日定例会終了後に、合同委員会ではないけれど予定しているとか、そういうことをしていただきたいと思っているので、今、只野委員が言ったように、両方のすり合わせ的なことを明日やったらいいと思っている。

委員長：それではそういうことで、今、鈴木議員の説明だけでまだこの内容をわかってないところがあるので、前にもらった資料もあるけれど、勉強していかないと、その中で疑問点があればそれぞれメモして、同じようなものが出たときには質問できるようにしておいてもらうということでもよろしいか。そして、帰ってから自分たちの町で、しっかり使えるように学んでいく。そういうことでよろしいか。それでは、道外研修についてはこれで。

事務局長：一応もう1ヶ所行くので。

委員長：そうだった。

事務局長：梶原町では一応分けてやってもらえる。こちらの所管の方では移住定住と地域おこし協力隊の活動内容についてということなので、この辺は、それこそ、去年、浦河行ったり、他の町行ったりしたような説明があるという感じなので、資料は前回含めてお配りしたので、その中で前もって気になるところがあれば、チェックしておいてもらって、当日その場で質問していただければという感じでよろしいか。一応確認する。

只野委員：梶原の資料見たけれど、その中でニュージーランドに留学というのがあって、1年間100万出すというところがあったのだが、これはあまり知らなかった話で、その場で質問するにも、100万では多分足りないと思うけれども。

事務局長：梶原の担当者からは、もし事前に何かあれば質問をいただきたいと話されているので、もし先に細かい数値的なことを当日聞きたいと言っておけば向こうで用意してくれると思う。

只野委員：そうしたら、梶原の100万円というのは本当はどのぐらいかかるのかというのと、あと、それがいつから続いてどのぐらいの応募者があって、どういう効果まで言ったら失礼だけれど、そこまで聞きたいと思っているが。

事務局長：明日、向こうからも何かあると思うので、まとめて質問していく。

委員長：神山町2人、梶原町2人ぐらいの質問、でも分かれてやるから皆できるか梶原町は。

事務局長：梶原は分かれてやるから聞きやすいというか、その場でやりとりができるのではないかな。両方ともそれなりに人気があるというか、移住者にとっては。もし質問があれば明日までをお願いします。

委員長：それでは明日まで考えて提出願う。そういうことでそれぞれ神山町と梶原町の質問、やはり一問なり二問なり考えておくというのが大事だと思うので、よろしくお願いします。これでよろしいか。

（「はい」との声あり）

（２）その他

委員長：それでは、道外研修の件はこれで終わる。その他。

事務局長：先程少し話したけれども、明日、全員協議会があるので、そのあと残って今の研修の全体的な話をできればと思うので、よろしくお願いします。

委員長：そういうことで、明日は全員協議会と研修の話をするので、皆も考えてくる。それでよろしいか。それでは、本日の総務産業常任委員会は以上で終了する。

【終了 15：47】